

# えんちょうだより

赤城育心こども園  
園長 深町 穂

まだまだ、本格的な春ではありませんが、少し暖かい日が出てきました。

私の長年の趣味は、スキーなのですが、新型コロナウイルスのこともあるので、今シーズンは混んだスキー場には行かないようにしています。そこで、この1か月半、私は、週末になると地域のグラウンドに出かけ、合わせて5キロほどの距離になるジョギングとウォーキングをしています。昔は、5キロくらいのジョギングは、それほど負担に感じたことはなかったのですが、50も半ばになりましたので、がんばりすぎて体を壊したりして、仕事に影響の出ることのないよう、例えば、トラックを2、3周走ったら、1周は歩くというように、若いつもりになってしまいそうな自分をコントロールしながら運動をしています。それでも、ちょっと太陽が出ていれば汗も出てきますし、呼吸も上がってきますのでマスクを外して、思い切りハアハアと深い呼吸をすることになります。それが、なんとも心地よく、自分が生きていることを実感し、早朝であれば、さわやかな空気も味わうことができるわけです。

そして、先日、そこでうれしいことがありました。朝、ジョギングをしていると、時折一人のおばあちゃんが、シルバーカーを押しながらグラウンドを1周して行くのですが、その姿を、私はいつも「えらいなあ」と感心しながら見ていました。どうしても、気になって仕方がなくなった私は、ある日、自分が走っている足を止めて、そのおばあちゃんに声をかけてみました。ちょっと耳が遠い感じもしましたが、それでも、彼女は私の声に、笑顔で応えてくれました。私が、いつも姿を拝見していて、すごい人がいると思っていたと伝えると、自分が90歳であること。それから、かつては東北地方でさくらんぼの農家として仕事をしていたこと、今は、自分の子どもとところで生活をしていることなどを話してくれました。ほんの数分の会話でしたが、普段は、他に走っている人がいても互いに挨拶をすることなどほとんどないのに、私が声をかけたことで、こんなに素敵なおばあちゃんとお話ができ、私は、とても温かい気持ちになりました。今は、知らない人に声をかけると不審者に思われることもありますし、コロナの心配もありますので声をかけてきた人に気軽に答えることが、必ずしも安全であるという保証はありませんので、皆さんに、こうしたことを安易に勧めることはできませんが、でも、こういう関係、私は大好きです。

コロナが流行する前は、よく家族でキャンプに出かけました。旅先で、道に迷った時やテントを張るキャンプ場の近くにいい温泉がないかを探す時、スーパーや道端で、地元の人に尋ねるのは、いつも私の役割でした。要するに、私は、どこでも知らない人に声をかけるのが好きなのです。そこから、思いもかけない情報を得ることができることもありますし、偶然再会して、声を掛け合うことになったりもします。以前は、妻に「よく知らない人に気軽に声をかけられるね」と尊敬だか軽蔑だかわからないようなことを言われたものですが、最近、妻もそんなふうに旅先等で知らない人に声をかけるようになりました。

コロナの時代、そして、不審者も少なくない今、ここに書いたことをそのまま実践するには、確かに注意が必要です。それは、大前提ですが、やはり、人と人がつながることはとても素敵なことだと思います。こんな時代だからこそ、ともに助け合いながら生きていく必要があるのに、都会では、お隣さんの名前や顔を知らないなどということは普通です。自分から人に声をかけるには、少しの勇気が必要です。でも、もし、よかったら、皆さんもマスクをしたうえで、散歩中に会った人、車で道を譲ってくれた人に、笑顔で挨拶をすることから挑戦してみてもいいのではないでしょうか。